

15 二十世紀初頭のイエエルサレムにおけるマラリア

馬場 わかな

現在、イスラエルにおける医療水準はきわめて高い。国の医療支出は国民総生産の八・七パーセントに相当し、他の西側諸国のそれに比肩するほどである。しかし、そのイスラエルでも、十九世紀においてはマラリアや赤痢、腸チフス、トラコームなどの疾患が蔓延し、深刻な影響を及ぼしていた。当時のイスラエルは、オスマントルコ帝国領内の低開発地域にすぎず、二十世紀に入つてようやく公衆衛生の整備が開始されるような状況だったのである。

本報告では、世紀転換期におけるイスラエルの中心都市イエエルサレムでの疾患の姿とそれに対して講じられた対策の歴史的意義について考察したい。分析に用いるのは、『ドイツ医学週刊誌』およびドイツで設立された

「イエエルサレムにおけるマラリア撲滅のためのドイツ協会」(以下、マラリア撲滅協会)が刊行した『イエエルサレムへのマラリア調査隊に関する報告書』などの一次史料である。管見の限りでは、本報告のような観点からの研究は存在しない。その理由としては、史料の制約が挙げられよう。上記の史料には体系的な統計などは含まれておらず、諸疾患の推移を解明するのは困難だからである。しかし、マラリア撲滅協会による報告書をもとに、イエエルサレムにおける疫学的な特徴を浮き彫りにすることは可能であるし、さらにはこの都市が抱える特有の問題について明らかにすることもできよう。

二十世紀初頭、イエエルサレムには三種類のマラリア(熱帯熱マラリア、三日熱マラリア、四日熱マラリア)が存在し、その感染者数は減少するどころか増加していた。とりわけ、短期間で重症化・死亡する危険のある熱帯熱マラリアが最も蔓延していた。熱帯地方に比べると、マラリアが直接の死因となることは稀であったが、マラリアの続発症や合併症による死亡は、イエエルサレムの方がむしろ多いくらいだった。イエエルサレムのマラリアはそ

れほどまでに深刻な状況にあったのである。こうして一九一二年、ドイツからマラリア予備調査隊がイエルサレムに派遣され、マラリアをはじめとする感染症や衛生状態の集団調査が行われた。その翌年には調査結果に関する詳細な報告書が刊行され、ベルリンでマラリア撲滅協会が設立される。この協会はイエルサレムにおける感染症を撲滅し、上下水道の整備などの開発を進めることを目的としていた。

ここで、なぜドイツかという疑問が生じるであろう。既述のとおり、イエルサレムは当時、トルコの一地域だった。そのトルコへの進出を企図していたのがドイツである。ヴィルヘルム二世は二度にわたってトルコを訪問したが、特に一八九八年の訪問はオリエントへの関心と進出を内外に誇示することになり、一九〇三年にはドイツ資本により設立されたバグダード鉄道会社が本格的な鉄道建設に着手するに至る。このバグダード鉄道は「ドイツ帝国主義の基本線」と称され、イギリスの三C政策やロシアのバルカン・近東への南下政策を牽制する上で重要な役割を果たした。

ドイツのオリエントに対する関心が募っていく中で注目されるようになったのが公衆衛生である。イエルサレムでは国家的・宗教的利害が激しく対立しており、それが公衆衛生整備の遅れをもたらす一因となっていた。マラリア撲滅協会はこのことに着目し、国や宗派を超えた協力の重要性を説いたのである。しかしながらその背景には、イエルサレムでの公衆衛生の整備を通じて、科学研究のプレゼンスを示威するとともに、確固たる影響力の基盤をオリエントに築こうとするドイツの意図があった。すなわち、マラリア撲滅協会の活動は、ドイツ帝国主義の象徴として理解することができるのである。

(東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程)